

## Cloningerの気質次元と情動経験及び情動制御との関連

藤岡 久美子

地域教育文化学部 域教育学科

三浦 真理

山形県スクール・カウンセラー

(平成20年10月1日受理)

### 要 旨

大学生約300名を対象とし、Cloningerの気質次元と情動経験及び情動制御との関連を検討した。日本語版TCI短縮版から4つの気質次元(新奇性追求、損害回避、報酬依存、持続)の尺度を用い、Izardら(1993)の個別情動尺度から、喜び、悲しみ、怒り、恐れ of 尺度、及び、独自に作成した情動制御尺度とともに実施した。重回帰分析の結果、4つの情動経験及び、ネガティブ情動からの回復しにくさに対して、損害回避が関連していた。さらに、気質の3次元の高低の組み合わせによる気質類型と情動特徴の関連を検討した結果、喜びに対しては、気質の複数の次元が交互作用的に影響を与えていることが示唆された。

### 1. 問題と目的

Farmer & Goldberg (2008a)によれば、Cloninger (1987)が提出した生物学的パーソナリティ・モデルは、その後、精神病理学と心理学において以下のように多様な研究を刺激した。例えば、パーソナリティ特性の普遍性や文化的差異、健常範囲のパーソナリティ特性と病理的パーソナリティとの連続性、連合学習や道具的学習における個人差の検証や、パーソナリティの遺伝的規定性に関する研究等、幅広い研究において、Cloningerのモデルがフレームワークとして用いられている。

Cloningerのモデルの特徴として、神経生物学的メカニズムと学習理論をパーソナリティのbio-social理論として統合しようとした点があげられる(Stallings, Hewitt, Cloninger, Heath, & Eaves, 1996)。Cloninger (1987)は、はじめに、新奇性追求(Novelty Seeking)、損害回避(Harm Avoidance)、報酬依存(Reward Dependence)からなる3次元モデルを提唱し、3次元人格目録(Tridimensional Personality Questionnaire, TPQ)を作成した。これら3次元は、それぞれ対応する神経生理学的プロセスが想定され<sup>1</sup>、行動傾向(接近、回避、逃避)、様々な環境事象(新奇性、報酬、罰、弁別刺激、無条件刺激)に対する敏感さと反応性によって記述される。

新奇性追求は行動活性系であり、新奇刺激や報酬の兆しや嫌悪状況からの解放の兆しの存在に際する強い興奮の経験と関連している。新奇性追求が高い人は、探検や冒険的行動

が多く、おもしろいやりがいのあることを求め、単調な状況を回避する。損害回避は行動抑制系であり、罰や新奇性の兆しに対して敏感で反応しやすい傾向である。損害回避が高い人は、抑制的で、消去の効果が出やすく、嫌悪状況を回避する傾向が強い。報酬依存は、行動維持系 (maintenance system) であり、報酬 (とりわけ社会的報酬) に条件づけられた信号に対して強く反応する傾向と関連している。報酬依存が高い人は、嫌悪からの解放に特に敏感で、また消去抵抗が高い。

これら行動の活性、抑制、維持に関わる神経システムの相互作用で、罰、報酬、新奇性に対する特定の行動反応パターンが生じ、それがパーソナリティの多様性及びパーソナリティや行動の病理の発達を説明すると考えられている (Cloninger, 1987)。

のちに Cloninger, Svrakic, & Przybeck (1993) は、報酬依存の下位尺度の1つを独立の次元と見なし、第4の次元として持続 (Persistence) を加えた。持続は、断続的な強化にもかかわらず行動を持続することと定義された。これら4次元を「気質 (temperament)」の次元とし、新たに「性格 (character)」3次元を加え、パーソナリティの7次元モデルとした。ここで、気質は「発達初期に顕在化し、生物学的に (遺伝的に) 規定され、学習における前概念的バイアスを含む」ものであり、環境の影響は受けにくく、生涯を通じて比較的安定していると定義された。一方、性格は「自己概念の発達によって成人期に成熟し、概念的学習や洞察学習を含む」とされた。モデルの改訂に伴い、TPQを改変し、気質・性格目録 (Temperament and Character Inventory, TCI) が作成された。

ところで、気質の定義及び次元に関しては、情動面を強調する研究者も多い。例えば、Allport (1961) は、気質を「情動的刺激への感受性、反応の強度とスピード及び気分を含む個人の情動の性質の特徴的現象であり、これらの現象は生得的な性質によると仮定される」と定義している。また、気質の次元については、例えば、Rothbart, Ahadi, & Evans (2000) は、成人用気質尺度4次元のうちの1つに「否定的感情」をあげ、さらに、「外向性」次元の下位尺度として「肯定的感情」を設定している。

Cloningerによる気質の定義と次元は、上述のように学習理論と神経生物学的メカニズムにより記述されている。そのため、他の研究者の気質次元に比べて、気質と情動特性の関係性が理論の中核にはなっていないが、以下のように気質次元と情動特性の関連が仮定されている。すなわち、新奇性追求は怒りと衝動性、損害回避は恐怖と不安、報酬依存は愛情、愛着との関連が仮定されている (Svrakic et al., 1999)。このような Cloninger が示唆する気質次元と特定の情動との関連について実証しようとする研究もある。例えば、Puttonen et al. (2005) は、健康な成人を対象に実験場面で種々の課題遂行中及び遂行後の感情状態の評定を求め、TCIの気質次元との関連を検討した。新奇性追求は、単調な課題状況や嫌悪的状况での退屈さや、好む状況やベースラインでの愉快さと関連し、損害回避は、恐れの高さやポジティブ感情の低さと関連していた。しかしながら、概して、損害回避と抑うつ傾向の関連を示す研究は多くなされているのに対し (Brown et al. 1992; Cloninger et al., 2006; 本邦でも、松浦ら, 2008; 内藤ら, 1999)、他の次元と感情の関連については、あま

<sup>1</sup>新奇性追求、損害回避、報酬依存は、それぞれ中枢神経系のドーパミン、セロトニン、ノルアドレナリンの分泌と代謝に依存しているものであると想定されている。仮定された神経プロセスの実証に関しては、部分的に支持する結果と支持しない結果が混在している (Farmer & Goldberg, 2008b)。

り知見が蓄積されているとは言えない。

そこで、本研究では、Cloningerの気質の次元と情動特徴の関連について以下のような検討を行う。第1に、Izard et al. (1993)の個別情動尺度4版(DES-IV)から、喜び、悲しみ、怒り、恐れの4つの基本情動尺度を用いて、Cloningerの気質次元とこれらの情動経験の多さとの関連を検討する。新奇性追求と怒り、損害回避と恐れのように、特定の気質次元が特定の情動経験に関連するのかを明確にする。さらに、気質次元の高低の組合せによる類型によって情動特徴の差異を検討し、複数の気質次元が情動経験に対して交互作用的に影響しているか否かを調べる。Cloningerは新奇性追求、損害回避、報酬依存の高低の組合せから、8つのパーソナリティ傾向を表し、それぞれの気質特性が極端になった場合に、どのような人格障害(反社会性、自己愛性、強迫性など)を有する可能性があるかを対応させている(木島ら, 1996)。本研究においても、持続を除いた3次元の組合せによる8群を設定し、情動特徴を比較する。

第2に、情動制御と気質の関連についても検討する。情動制御の中でも、自動的な制御としてのネガティブ情動からの回復しやすさと、意識的・努力的な情動制御、及び情動表出の調整をとりあげる。ネガティブ情動からの回復しやすさは、乳幼児の気質次元の1つに挙げられているので(e.g., Thomas & Chess, 1963)、気質による説明率が高いと予想される。

## 2. 方法

**対象者** 山形県内の大学生301名(男86名、女215名)で、平均年齢は20.16歳(SD=2.00)であった。

**調査時期及び手続き** 2004年12月に実施した。授業時に質問紙を配布し、その場で、あるいは後日回収した。

### 尺度

**情動制御**：ネガティブ情動からの回復しにくさ、意識的な情動の制御、情動表出の調整に関する項目を作成した。回復しにくさの項目は独自に作成し、意識的制御についてはストレスコーピングの尺度(神村ら1995;大竹ら1998)を参考に、表出の調整は久木山(2002)の情動コンピテンス尺度を参考に作成した。回復しにくさは、「嫌な気持ちを感じたあとの自分について」、意識的制御は、「今までの経験で強く嫌な気持ちを感じた時にしたことについて(「強く」というのは、その気持ちのせいで日常生活の他のことが影響を受ける程度)」、表出の調整は「普段の自分について」、各質問項目についてそれぞれ6件法(全くあてはまらない～よくあてはまる)で回答を求めた。因子分析(主因子法・promax回転)を行い、4因子が妥当と判断された。共通性が低かった2項目を除外し、再度分析を行った。第1因子は回復しにくさの項目、第2因子は表出の調整の項目がそれぞれ高い負荷量を示したが、意識的制御は、第3因子に「その気持ちになったことをあまり考えないようにした」などの情動及びその原因から目をそらす内容と、第4因子に「その気持ちを変えるにはどうしたらよいかを考えた」などの情動及びその原因に向き合う内容との2つに分かれた。そこで、第3因子を回避的制御、第4因子を追求的制御と名付けた。因子パターン行列をTable 1に示した。

Table 1 情動制御尺度 因子パターン行列

項目	F1	F2	F3	F4	共通性
嫌なことを忘れるのは大変な方だと思う	.886	.002	.117	.009	.791
嫌なことがあると、そのことをずっと考えてしまう	.857	-.001	-.007	.016	.738
嫌なことがあってもすぐに忘れる方だと思う	-.806	.075	.072	.002	.637
気持ちを引きずるタイプだと思う	.800	.001	-.023	.061	.656
嫌なことを思い出して、再びその気持ちになることが多い	.755	.043	-.046	.002	.594
気持ちを切り替えることが難しい方だと思う	.740	-.010	.074	.059	.555
嫌なことがあっても、その後いいことがあると忘れる	-.572	.040	.170	.144	.368
感情を出すときには、強さやタイミングを考える	-.110	.775	-.083	.180	.579
感情を出してもいい状況かどうかを判断して感情を出す	-.094	.732	-.085	.109	.500
自分の表情や態度が、まわりにどんな影響を与えるか考えて行動する	.046	.695	-.040	.205	.544
自分の表情を相手にあわせて意図的にコントロールする	.019	.598	.115	.018	.409
自分が本当に感じているままには感情を出さないことが多い	.144	.593	-.010	-.295	.484
まわりの状況に適した表情をする	.131	.580	.112	-.143	.445
感情は表に出さない方だと思う	-.152	.547	.026	-.252	.346
その気持ちになったことをあまり考えないようにした	-.026	.008	.804	-.075	.648
その気持ちになった原因を、たいしたことではないと考えた	-.182	-.101	.602	-.014	.399
その気持ちを忘れたつもりで振舞った	.121	.128	.564	.038	.389
その気持ちを紛らわすために、他のことに集中しようとした	-.020	-.030	.392	.241	.221
その気持ちを変えるにはどうしたらよいかを考えた	.019	.039	.042	.690	.489
なぜ自分がそんな気持ちになるか、理由を考えた	.137	.016	.064	.558	.355
その気持ちを起こさせる原因を解決するために具体的な行動をとった	-.100	-.018	-.051	.551	.302
寄与率(%)	23.252	13.299	7.4137	5.802	
累積寄与率(%)	23.252	36.551	43.965	49.767	
因子相関行列					
	F1	—			
	F2	.267	—		
	F3	-.051	.229	—	
	F4	.093	.033	.072	—

情動経験：Izardら（1993）の個別情動尺度4版（DES-IV）から、喜び、悲しみ、怒り、恐れについて各3項目を翻訳して用いた<sup>2</sup>。項目に示される感情を、普段どのくらいの頻度で経験するか5件法（めったにない～しょっちゅうある）で回答するように教示が与えられた。

Cloningerの気質尺度：木島ら（1996）による日本語版TCI短縮版から気質の4尺度、新奇性追求19項目、損害回避20項目、報酬依存15項目、持続5項目を用いた。4件法で回答が求められた。4尺度それぞれについて項目－全体相関を検討したところ、損害回避及び持続についてはどの項目も中程度以上の相関を示していたが、新奇性追求及び報酬依存においては、項目－全体相関が.20以下の弱い相関を示す項目がそれぞれ4項目あった。しかし、他研究との比較の点から、原尺度通りで分析に用いることとした。

$\alpha$ 係数はTable 2に示すように、ほぼ十分なものであった。それぞれ項目の合計得点を尺度得点とした。各尺度の記述統計量もTable 2に示した。

<sup>2</sup>項目例：喜び－何かについて嬉しいと感じる。悲しみ－寂しくて泣きたい感じがする。怒り－いらいらしてむかつく。恐れ－びくついたり心配になったりする。

Table 2 各下位尺度の記述統計及び $\alpha$ 係数

	平均値	SD	$\alpha$ 係数
喜び	10.18	2.43	.743
悲しみ	9.09	2.70	.789
怒り	7.85	2.92	.842
恐れ	6.74	2.65	.776
新奇性追求	47.44	7.12	.721
損害回避	53.97	10.14	.883
報酬依存	42.99	5.79	.692
持続	13.00	2.95	.675
回復しにくさ	26.32	7.60	.909
追求的制御	11.44	2.92	.655
回避的制御	13.35	3.57	.675
表出調整	27.31	6.04	.824

### 3. 結果

#### (1) 予備分析

下位尺度間相関はTable 3に示されるとおりであり、新奇性追求と損害回避の間に中程度の負の相関 ( $r = -.47$ ) が示された。この2尺度間の相関は、木島ら (1996) の $-.37$  ( $n = 377$ )、国里ら (2008) の $-.32$  ( $n = 457$ ) と比較して、やや高めであったが、他については概ね先行研究と同じであった。4つの情動経験の相関は、ネガティブ感情間で強かったが、喜びとネガティブ感情との間には弱い相関しか示されなかった。

Table 4には、性ごとの各尺度の記述統計を示した。悲しみ、損害回避、報酬依存はいずれも女性が有意に高かった ( $t(299) = 2.52$ ;  $t(292) = 2.24$ ;  $t(293) = 4.25$ ,  $p < .05$ )。追求的制御のみ男性が有意に高かった ( $t(299) = 2.88$ ,  $p < .05$ )。

Table 3 下位尺度間の相関係数

	新奇性追求	損害回避	報酬依存	持続	喜び	悲しみ	怒り	恐れ	回復しにくさ	追求的制御	回避的制御
損害回避	-.472 ***										
報酬依存	.021	-.036									
持続	-.160 **	-.153 **	.261 ***								
喜び	.196 **	-.368 ***	.266 ***	.258 ***							
悲しみ	-.130 *	.490 ***	.027	.037	-.086						
怒り	-.031	.347 ***	-.057	-.034	-.181 **	.539 ***					
恐れ	-.162 **	.452 ***	-.125 *	.063	-.084	.580 ***	.443 ***				
回復しにくさ	-.271 ***	.601 ***	.024	.096	-.274 ***	.543 ***	.389 ***	.452 ***			
追求的制御	-.028	.025	.025	.208 ***	.136 *	.084	.084	.227 ***	.102		
回避的制御	.101	-.087	-.061	.039	.072	-.043	-.057	.078	-.093	.110	
表出調整	-.157 **	.107	-.228 ***	.052	-.178 **	.221 ***	.056	.263 ***	.202 ***	.021	.169 **

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$

Table 4 各下位尺度の性ごとの記述統計

	男		女	
	平均値	SD	平均値	SD
喜び	9.86	2.66	10.31	2.33
悲しみ	8.48	2.98	9.34	2.55
怒り	7.76	3.21	7.88	2.80
恐れ	7.06	2.83	6.61	2.57
新奇性追求	48.48	7.02	47.03	7.14
損害回避	51.92	10.95	54.82	9.69
報酬依存	40.81	5.50	43.88	5.69
持続	13.05	3.26	12.99	2.82
回復しにくさ	26.06	8.18	26.42	7.38
追求的制御	12.20	2.80	11.13	2.93
回避的制御	13.56	3.61	13.26	3.56
表出調整	27.64	6.82	27.17	5.71

## (2) 情動変数と気質の関連：重回帰分析

情動経験及び情動制御の各下位尺度を目的変数に、気質の4尺度及び性別（ダミー）を説明変数とした階層的重回帰分析を行った。Table 5に示されるように、4種類すべての情動経験に対して、損害回避が|.30|以上の有意な標準偏回帰係数を示した。特に悲しみと恐れは、.50以上と高かった。気質全体による説明率は、怒りが15%とやや低めであったが、他の3つの情動は25%前後であった。

情動制御については、「回復しにくさ」に対して、損害回避が非常に高い説明率を有していたが、他の情動制御変数には関連を示さなかった。また、持続が「回復しにくさ」「追求的制御」にわずかではあるが有意な影響を示し、表出の調整に対しては報酬依存が負の係数を示した。回復しにくさ以外は、気質による説明率は総じて低かった。

Table 5 階層的重回帰分析の結果

	従属変数	喜び	悲しみ	怒り	恐れ	回復しにくさ	追求的制御	回避的制御	表出調整
step1	$\beta$ 性別	.076	.131 *	.014	-.088	.022	-.163 **	-.052	-.025
	$\Delta R^2$	.006	.017 *	.000	.008	.000	.027 **	.003	.001
step2	$\beta$ 性別	.075	.084	-.006	-.112 *	-.055	-.174 **	-.020	.022
	新奇性追求	.071	.191 **	.185 **	.108	.090	.026	.077	-.094
	損害回避	-.319 ***	.594 ***	.450 ***	.542 ***	.688 ***	.091	-.055	.069
	報酬依存	.197 **	-.033	-.066	-.131 *	.010	.013	-.074	-.260 ***
	持続	.169 **	.160 **	.071	.185 **	.205 ***	.211 **	.052	.119
	$\Delta R^2$	.230 ***	.265 ***	.151 ***	.256 ***	.411 ***	.045 **	.017	.087 ***

※ $\Delta R^2=R^2$ 変化量 \*  $p<.05$  \*\*  $p<.01$  \*\*\*  $p<.001$  性別:男=0, 女=1

## (3) 気質3次元の高低の類型による情動変数の特徴

新奇性追求、損害回避、報酬依存のそれぞれについて平均によって高低に二分し、その組合せによって8群に分類した。各群の人数及び素点の平均とSDは、Table 6に示した。群の特徴を明示するために、各尺度のz得点の平均プロフィールをFigure 1及び2に示した。

Table 6 気質3次元高低の類型8群の各尺度平均及び標準偏差

	n	喜び		悲しみ		怒り		恐れ	
		平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
新H損H報H	28	9.75	2.46	10.57	2.73	8.82	2.94	8.00	2.64
新H損H報L	25	8.72	2.05	10.52	2.66	9.36	2.74	7.76	3.48
新H損L報H	49	11.29	2.29	8.14	2.15	7.29	2.56	5.35	1.90
新H損L報L	47	10.87	2.06	7.72	2.33	6.72	2.37	6.17	2.24
新L損H報H	54	10.19	2.09	9.69	2.54	8.30	2.98	7.48	2.70
新L損H報L	44	8.91	2.46	9.82	2.63	8.32	3.21	7.55	2.31
新L損L報H	23	11.43	1.85	8.22	1.86	6.61	2.61	5.04	1.61
新L損L報L	18	9.11	2.54	7.67	3.20	7.22	3.17	6.56	2.64

	n	回復しにくさ		追求的制御		回避的制御		表出調整	
		平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
新H損H報H	28	31.32	6.34	10.68	3.30	12.67	3.39	26.36	5.02
新H損H報L	25	29.12	7.27	11.20	3.08	13.04	3.03	27.68	7.06
新H損L報H	49	23.33	6.45	11.37	2.55	13.43	4.02	25.78	6.57
新H損L報L	47	20.94	5.91	11.81	3.19	14.19	4.26	27.60	6.37
新L損H報H	54	29.89	6.73	11.93	3.16	13.06	3.13	27.78	5.71
新L損H報L	44	29.61	6.69	11.66	2.51	12.80	3.48	29.30	6.44
新L損L報H	23	21.96	6.03	10.83	2.96	13.30	2.96	25.74	5.66
新L損L報L	18	23.28	7.45	11.28	2.91	14.29	3.44	28.33	4.60

新=新奇性追求, 損=損害回避, 報=報酬依存

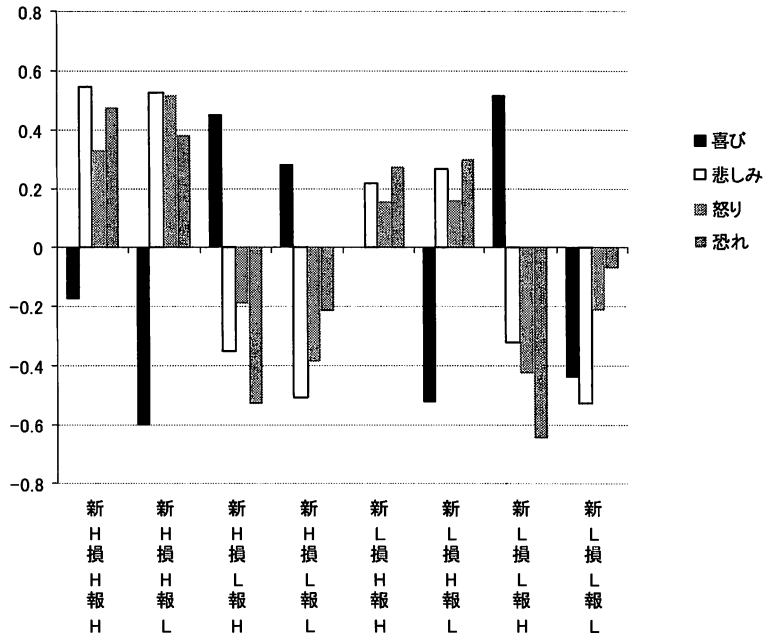


Figure 1 気質8群ごとの情動経験のz得点

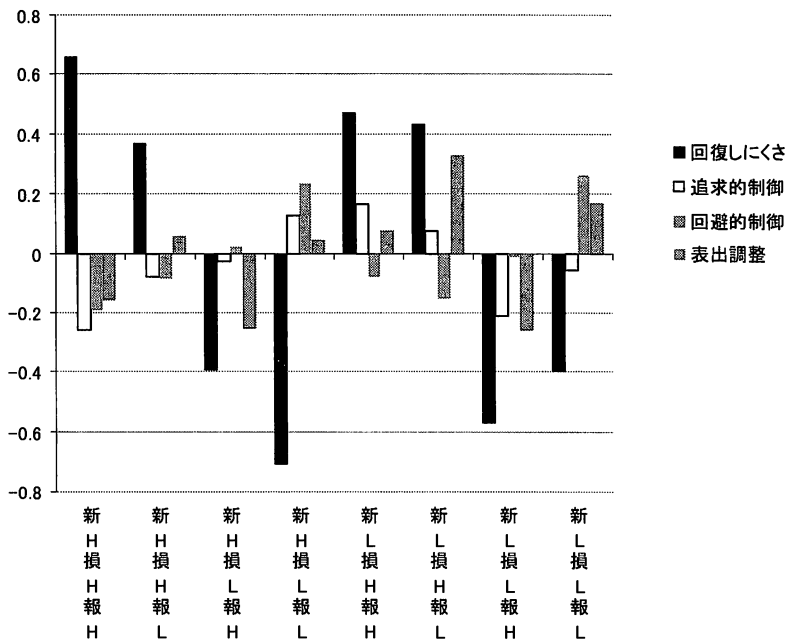


Figure 2 気質8群ごとの情動制御のz得点

Figure 1 に示されるように、3つのネガティブ情動は、概して損害回避の高低と対応しているが、喜びの高さは、新奇性追求が高い4群（新H）では、z得点の正負が損害回避の高低と対応しているのに対し、新奇性追求が低い群（新L）では、報酬依存の高低と対応していることが伺えた。

3要因（各気質次元の高低）の分散分析を行った結果、喜びでは、二次の交互作用が有意傾向（ $F(1,277)=2.927, p<.10$ ）、新奇性追求と損害回避の交互作用（ $F(1,277)=4.688, p<.05$ ）、及び、新奇性追求と報酬依存の交互作用が有意であった（ $F(1,277)=4.388, p<.05$ ）。下位検定の結果、新奇性追求高群（新H）では、損害回避低群（損L）>高群（損H）であった（ $F(1,277)=23.890, p<.01$ ）。一方、新奇性追求低群（新L）では、損害回避高低による差はなかったが、報酬依存の単純主効果が有意であり、報酬依存高群（報H）>低群（報L）であった（ $F(1,277)=20.104, p<.01$ ）。

恐れについては、損害回避と報酬依存の交互作用が有意傾向であり（ $F(1,277)=3.798, p<.10$ ）、損害回避低群（損L）において、報酬依存高群（報H）>低群（報L）となった（ $F(1,277)=6.345, p<.05$ ）。また、報酬依存の高低各群で、損害回避高群（損H）>低群（損L）であった（ $F(1,277)=34.976; 7.621, p<.01$ ）。

悲しみ及び怒りについては損害回避の主効果のみが有意であり（ $F(1,277)=19.526; 45.697, p<.01$ ）、いずれの交互作用も有意ではなかった。

Figure 2 には情動制御のプロフィールが示されている。いずれの変数についても有意な交互作用は示されなかった。なお、損害回避の主効果は、回復しにくさと回避的制御において有意であり（ $F(1,277)=79.179, p<.01; 3.986, p<.05$ ）、報酬依存の主効果は表出調整で有意であった（ $F(1,277)=5.265, p<.05$ ）。

#### 4. 考察

##### (1) 情動経験と気質の関連

気質次元と基本情動の関係のうち、損害回避と悲しみや恐れは明確に示された。悲しみと恐れは抑うつ気分と重なるものでもあり、この点で、先行研究で繰り返し示されている抑うつと損害回避の強い関連と一致する。ただし、損害回避は4種類の情動経験すべてに対して有意であり、気質と情動の個別の対応は示されなかったといえる。他の気質次元と情動の関連についても、Svrakic et al. (1999) で想定された新奇性追求と怒りは、標準偏回帰係数が.185と小さく、関連が示されたとは言い難い。Cloningerの理論におけるパーソナリティ次元による情動の弁別性については、疑問を投げかける研究者もおり（Farmer & Goldberg, 2008）、本研究の結果も、各気質次元が特定の情動と関連するという仮定に対しては否定的であると言える。

一方、気質3次元の高低の組合せによる分散分析の結果から、喜びについては、複数の気質が交互作用的に関連していることが示唆された。新奇性追求が高い場合は、損害回避の高低が、新奇性追求が低い場合は、報酬依存の高低が喜び経験の多さに関連していた。もともとCloningerの理論では、気質次元は新奇刺激、危険刺激、報酬刺激への反応性と行動傾向から記述される。新奇性追求、損害回避、報酬依存は、それぞれ3種類の刺激への反応性による。このうち、新奇刺激は、危険かそれとも報酬となりうるのかが未知の刺激と言える。未知な刺激への反応性、すなわち、潜在的に危険刺激あるいは報酬刺激となり



うる刺激に反応しやすいかどうかという性質と、危険刺激への敏感さあるいは報酬刺激への反応性といった他の性質との組合せによって、日常的にどのような情動を経験しやすいかが異なると考えることは合理的であろう。ただし、本研究において気質次元の明確な交互作用が示されたのは、喜びについてのみで、ネガティブ情動では示されなかった。本研究では4種類の基本情動のみを扱ったので、他の情動について、このような複数の気質次元の交互作用の影響が示されるのか、それとも喜び情動についてのみ特定の生じるのかは不明である。喜びは、興奮の高い快感情としても、あるいは安心感などの鎮静状態での快感情としても経験されるため、複数の気質次元が交互作用的に影響したとも解釈できる。

## (2) 情動制御と気質

予想された通り、ネガティブ情動からの回復しにくさについては、気質による高い説明率が示され、回復しにくさは生得的な性質によるところが大きいと言える。これに対して、意識的な情動制御に対しては、ほとんど気質次元は影響せず、持続の次元がわずかに、追求的制御、すなわち情動や情動の原因を考えることで情動を制御しようとする態度に関連していた。Bowlbyの愛着理論では情動制御の個人差は、乳幼児期からの愛着関係に内在する情動経験の質に由来すると考えられているが(坂上・菅沼, 2001)、本研究の結果からも、意識的な情動制御のあり方の個人差は、生得的なものではなく、発達における環境の影響であると考えられる。また、情動表出の調整は報酬依存と負の関連があり、報酬依存が高いほど情動表出の調整をしない傾向にあった。報酬依存は、行動のアクセラ(新奇性追求)とブレーキ(損害回避)の両者を社会的報酬(人との関わり)によって調整する働きとも表現される(木島, 2000)。自分の情動状態を抑制せずに他者に伝達することは、困窮や危険等に際して他者からの助力を引き出すことにもつながる。それゆえ、他者を行動調整のリソースとする傾向が高いと、表出は調整されず、ストレートに他者に向けられると考えられる。

## 文献

- Allport (1961). *Pattern and growth in personality*. New York: Holt.
- Brown, S. L., Svrakic, D. M., Przybeck, T. R., & Cloninger, C. R. (1992). The relationship of personality to mood and anxiety states: A dimensional approach. *Journal of Psychiatric Research*, **26**, 197-211.
- Cloninger, C. R. (1987). A systematic method for clinical description and classification of personality variants: A proposal. *Archives of General Psychiatry*, **44**, 573-588.
- Cloninger, C. R., Svrakic, D. M., & Przybeck, T. R. (1993) A psychological model of temperament and character. *Archives of General Psychiatry*, **44**, 573-588.
- Cloninger, C. R., Svrakic, D. M., & Przybeck, T. R. (2006). Can personality assessment predict future depression? A twelve-month follow-up of 631 subjects. *Journal of Affective Disorders*, **92**, 35-44.
- Farmer, R. F., & Goldberg, L. W. (2008a) A psychometric evaluation of the Revised Temperament and Character Inventory (TCI-R) and TCI-140. *Psychological Assessment*, **20**, 281-291.
- Farmer, R. F., & Goldberg, L. R. (2008b). Brain modules, personality layers, planes of being, spiral structures, and the equally implausible distinction between TCI-R "temperament" and "character" scales: Reply to Cloninger (2008). *Psychological Assessment*, **20**, 300-304.
- Izard, C. E., Libero, D. Z., Putnum, P., & Haynes, O. M. (1993) *Stability of emotion experiences and*

- their relations to traits of personality. Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 847-860.
- 神村 栄一・海老原 由香・佐藤 健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 (1995) 対処方略の三次元モデルの検討と新しい尺度 (TAC-24) の作成 教育相談研究 (筑波大学), **33**, 41-47.
- 木島伸彦 (2000) クロニンジャーの理論と人格障害 現代のエスプリ, **392**, 184-191.
- 木島伸彦・斉藤令衣・竹内美香・吉野相英・大野裕・加藤元一郎・北村俊則 (1996) Cloningerの気質と性格の7次元モデル及び日本語版Temperament and Character Inventory (TCI) 季刊精神科診断学, **7**, 379-399.
- 久木山健一 (2002) 情動コンピテンスと社会的情報処理の関連—アサーション行動を対象として— カウンセリング研究, **35**, 66-75.
- 国里愛彦・山口陽弘・鈴木伸一 (2008) Cloningerの気質・性格モデルとBig Fiveモデルとの関連性 パーソナリティ研究, **16**, 324-334.
- 松浦素子・菅原ますみ・酒井厚・眞榮城和美・田中麻未・天羽幸子・詫摩武俊 (2008) 成人期女性のワーク・ファミリー・コンフリクトと精神的健康の関連—パーソナリティの調節効果の観点から— パーソナリティ研究, **16**, 149-158.
- 内藤まゆみ・木島伸彦・北村俊則 (1999) 抑うつ発生の生起に寄与するパーソナリティ特性の性別による相違 性格心理学研究, **8**, 23-31.
- 大竹恵子・島井哲志・嶋田洋徳 (1998) 小学生のコーピング方略の実態と役割 健康心理学研究, **11**, 37-47.
- Puttonen, S., Ravaja, N., & Keltikangas-Jvinen, L. (2005). Cloninger's temperament dimensions and affective responses to different challenges. *Comprehensive Psychiatry*, **46**, 128-134.
- Rothbart, M. K., Ahadi, S. A., & Evans, D. E. (2000) Temperament and personality: Origins and outcomes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 122-135.
- 坂上裕子・菅沼真樹 (2001) 愛着と情動制御—対人様式としての愛着と個別情動に対する意識的態度との関連— 教育心理学研究, **49**, 156-166.
- Stallings, M. C., Hewitt, J. K., Cloninger, C. R., Heath, A. C., & Eaves, L. J. (1996). Genetic and environmental structure of the Tridimensional Personality Questionnaire: Three or four temperament dimensions? *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 127-140.
- Svrakic, D. M., Przybeck, T. R., Whitehead, C., & Cloninger, C. R. (1999). Emotional traits and personality dimensions. Cloninger, C. R. (Ed). *Personality and psychopathology* (pp. 245-265). Washington, DC: American Psychiatric Association.
- Thomas, A. & Chess, S. (1963) Behavioral individuality in early childhood. New York University Press.

### Summary

**Kumiko Fujioka<sup>1)</sup>, Mari Miura<sup>2)</sup> :**

**Cloninger's temperament dimensions, emotional experiences and emotional regulation.**

The purpose of this study was to examine the relation among Cloninger's temperament dimensions and emotional experiences and emotional regulation. 300 university students answered the questionnaire, which consists of four temperament dimensions (Novelty Seeking, Harm Avoidance, Reward Dependence, Persistence), experiences of basic emotions (happiness, sadness, anger, fear), and emotional regulation. The results showed the correlations between Harm Avoidance and all four emotions, while the other temperament dimensions did not correlate. The present study does not support the validity of Cloninger's assumption that temperament dimensions predict specific emotions.

<sup>1)</sup> The Faculty of Education, Art and Science, Yamagata University

<sup>2)</sup> School Counselor, Yamagata Prefecture